

在満日本人小学校の中国語教科書 教材の社会的性格を中心に

磯田 一雄

一 在満日本人小学校における 中国語教育の意義

日本の植民地の中でも「満洲・満洲国」は他の植民地とは際立った特色を持っている。問題をここでは教育に限定していうならば、現地に在住する日本人の子どもたちの教育に関して「内地延長主義」と「現地適応主義」との対立があったことがそれである。日本の植民地における教育は植民地化された民族に関しては日本語や日本文化を通じて日本に「同化」させる教育をするが、現地に在住する日本

人の子どもには内地（母国）と同一の教育を施す「内地延長主義」に依るのが原則であった。それに対する現地適応主義とは、本稿では詳論を避けることにするが、日本内地と同質の教育に「満洲にふさわしい何かをプラスする」教育を施すという意味である。そのために在満日本人小学校用に多数の補充教科書や正教科書が教科書が現地で編纂された。その「プラスする何か」にもっともふさわしいのが中国語だったのである。

かつて筆者は、現地適応主義を取るか取らないかは「究極的には日本人に中国語を学ばせることをどう考えるかの問題に帰する」といつてよいだろう。ほかの科目の場合には、

教科書や教え方が少しばかり変わっただけに過ぎないとも言えるが、外国語の学習があるか無いかの差は決定的な差になると思われるからである」と書いたことがある。⁽³⁾ 相手の言語を学ぶという体験をしかも初等教育（小学校上学年）において、（随意科目としてはあっても）曲がりなりにも行った点で、満洲の日本人教育は独特であった。台湾や朝鮮での日本人教育は台湾人や朝鮮人の教育と接する面がきわめて乏しかったし、初等教育において朝鮮語や台湾語を学ぶということも全くなかったのである。また世界の植民地教育の歴史から見ても、植民地の初等・中等教育において被植民者の言語を植民地支配者の子どもたちに学ばせたということとはほかにほとんど例がないであらう。⁽⁴⁾

筆者は語学教育研究者でもなければ、中国語に堪能であるわけでもない。したがってこれらの教科書の語学教育的な側面での検討は、中国語教育の専門家に譲るしかない。ただこれまで国語や歴史・音楽などを中心に、在満日本人小学校用の教科書の研究にいささか従事してきたので、「現地適応主義」の中核である中国語教科書についても、他教科の教科書と共通するような問題を、教材の社会的性格を中心に探ってみたいと考える。

二 ミイラ取りがミイラにならぬか

一九一四（大正三）年に渡満した幣原坦は、オランダの植民地では「蘭領印度史大要」が必須科目となっているが、「土語」は教えないのに対し、「満洲では、それと反対に、支那歴史は之を教授しないが、……尋常第五学年以上に、随意科として支那語及び英語を課している」として「支那の歴史を授けないのは必ずしも不賛成ではないけれども、本邦と支那との国情の比較、並びに支那の国情に処する用意の一端ぐらゐは、機会を利用して話して置きたい」といい、さらに「支那語の教授は、さし当り大なる便宜を与へるから、之を教へるのはよいが、之を授けて支那人を我等の方へ引きつける助けになれば頗る面白いけれども、其の反対に、支那の方へ引きつけられる様な傾向があつてはならぬ」と述べている。彼はさらに「又他国の言語を教へることは、生活にこそ便宜を与ふれ、性格の構成には、さしたる裨益を見ないのであるから、時々支那人に対する心得の一斑を説くことによつて、始めて価がつくと思ふ。而して其の心得は、単に喧嘩をするなどが、いじめて

はならぬとか云ふ様な、消極的方面に止らずして、如何に支那人を支配すべきかといふ様な、積極的方面に及びたいものと思ふ」と付け加えている。

ここには権力側にとつての在満日本人教育における現地主義の位置付けがきわめて正直になされている。中国語を学ばせるのは、日本人が中国(人)を「支配するため」に有用だからであつて、それに「引きつけられ」てはならないと言つのである。換言すれば「ミイラ取りがミイラになる」ようなことになつてはならないということである。

しかしどのような意図で行われようと、それを学ぶ子どもが中国や中国人に「引きつけられる」(同化される)可能性を阻止することは困難である。実際当時満洲では「日本人は同化されやすい」から中国人との共学は避けねばならぬという議論をなすものがあつた。中国語を学ばせることもそれに近い影響があるかもしれない。これは現地主義のもつとも基本的な矛盾であつた。

だが一口に中国語を学ばせるといつても、おのずからその中身が一つに決まつてくるわけではない。中国語教育の教材の選び方が問題になる。例えば同じ時期にしかも同じ編集部で作られた中国語の教科書でありながら、日本人用

の中国語の教科書がごく平凡な日常的な生活しか語らないのに対して、中国人用の中国文教科書はそれより一歩も、二歩も踏み込んだ内容 孫文とか三民主義とか を伝えていて、というような大きな差があつたりすることも生じてくるのである。

この点は後で再論するけれども、確かに同じく中国語教育を行つていても、その教材に三民主義を入れるかどうかというような内容の違いによつてその効果も非常に違つてくるのは事実である。そういうことを教えれば中国人の立場でものを考える人間ができる可能性がある。日本人の中国語教育にそういう教材が入らなかつたのは、幣原坦が指摘しているように「支那の方へ引きつけられる様になつてはならぬ」という恐れからである。まさにミイラ取りがミイラになるような事態を避けるためであつたといえる。この意味で現地主義は日本の権力側にとつていわば「両刃の剣」であつた。現地主義の内容はこの意味から当然統制される必要があつたのであり、在満日本人用教科書の歴史はいわば現地主義の修正過程の歴史であつたといつてもよい。

三 満洲で編纂された中国語教科書

在満日本人小學校における中国語教育の歴史やその背景については本稿では省略するが、満鉄附屬地では早くから小學校（正確に言えば現在の小學校の第四、六学年に相当する小學校専常科の高学年）においても中国語教育を行っていた。もともと日本人にとっては同じく「満洲」の概念に入る関東州においては、租借地ではあるが直轄植民地に近い意識をもっていたため、小學校で中国語教育を始めたのははるかに遅いという点に、満鉄附屬地と関東州における教育の差を見ることが出来る。

在満日本人に対する中国語教育が小學校においてもかなり早い時期から行われていたにもかかわらず、正規の教科書の編纂はかなり遅れ、ようやく昭和年代に入ってからである。それは「支那語」が「随意科目」「選択科目」であったためでもある。そのため実際の授業は「教員が黒板に板書するといった方法や、市販の簡易テキストを使用する方法などで行われていた……ガリ版で教材を作る熱心な教師も」いたとい⁹⁾う。

やがて在満日本人小學校と日本側で経営する中国人小學校での教科書を編纂するために、南満洲教育会教科書編輯部（一九三七年に在満日本人教育会教科書編輯部、一九四一年に関東局在満教務部教科書編輯部となる）が設立された。ここで編纂された日本人小學校用の正規の中国語教科書は次の通りである¹⁰⁾。

初等支那語教科書（稿本） 卷一〜卷五（一九二八〜一九三〇年）

初等支那語教科書（稿本）教師用 卷一〜卷五（一九二八〜一九三一年）

支那語教科書 上巻・下巻 一九二八年（両巻同時発行）

初等支那語教科書 卷一〜卷五（一九三六〜一九四〇年）

初等支那語教科書教授参考書 卷一〜卷三（一九三七〜一九四〇年）

中等支那語教科書 卷一〜卷五（一九三六年〜一九四〇年）

初等科満語・第四学年（一九四四年）

なお満洲における中国語の呼び方(科目名ないし教科書名)には、時代により清語・華語・支那語・中国語(中国語)・満洲語(満洲話)・満洲国語・満語などがあるが、右の教科書の表題としては、国民学校期以前の編纂のものは「支那語」、国民学校期の編纂のものは「満語」である。しかし中には「中国語」という名前の教科書もあり、さらに教科書を「中国語」と呼んでいた時期もある¹²⁾。野村章は中国語を「満語」と呼ぶようになったのは「満洲国」建国後のことで、「中国人」や「中国語」という言葉は禁句となつたと述べている¹³⁾。確かに一九三一年に発行(初版は一九三〇年)された『稿本・初等支那語教科書』の巻四では「中国菜」、同巻五(一九三四年発行、一九三〇年初版)では「中国話」だったが、改訂版では「巻四」(一九四〇年改訂再版)の「中国菜」は不変なのに、「巻五」(一九四〇年初版)の「中国話」が「満洲話」に変えられているような例はある(巻一〜巻三は、稿本時代は言語名そのものが出てこず、新本は「満洲話」「満洲菜」に統一される)。また満洲国の新学制(一九三八年実施)下の教科書では「満語国民読本」「満語国民道徳」などのように「満語」が使用されるようになる

つた。

一方日本人用の『中等支那語教本』(一九三六年初版)は明らかに満洲国建国後に編纂されているにもかかわらず、一九四一年に発行された七版でもなお「中国話」と「満洲話」を混用している。一九三七年初版の「巻三」では「満洲話」になっているが、「巻五」は一九四〇年初版なのに「中国菜」「中国的礼法」の課名があり、「中国話」もあれば「中日両国人的習俗」では「中国人」が頻発され、最後の「大亜州主義」では孫文を「近世中国的大政治家」と誉めたたえている(ただし「三民主義」は出てこない。大アジア主義は大東亜共栄圏論に援用できるが、三民主義は邪魔になるからである)。このきめこまかな使い分けは何に基づいているのであるのか。「巻五」では対象が華北になっているためだと思われる。ここでは「満洲語」「満洲人」などは明らかに使えない。そのためにこの「巻五」の「第一課 研究語学」では日本と「満洲国」の相互理解と提携のために語学研究が不可欠だとしながらも、対象となる言語の名前が出てこない。ここで「満洲話」といってしまうと、同じ教科書の後に続く華北を対象とした課では同じ言語なのに「中国話」といわねばならず、混乱するからではあるまい

か。言語名をあまりにも拘子定規に国名と結びつけたため生じた喜劇といえよう。

初等教育における公的な教科名としては、「関東国民学校規則」（一九四二年）において従来の「支那語」を「満語」と改めるように規定している。しかし在満・関東国民学校における正規の教科書『初等科満語』は、第四学年用がようやく一九四四年に刊行されたのであって、それまではもちろん、その後も第五年以上では当然ながらその前の時期の教科書「初等支那語教科書」が題名を変更することなく使用されていたのである。

四 画期的な中国語教科書

『稿本・初等支那語教科書』

一九二八年から一九三〇年にかけて発行された『稿本・初等支那語教科書』（全五巻）は在満日本小学校用の最初の公的な中国語教科書である（以下「稿本」と略す）。稿本とは試作品であることを示しているが、これをその改訂版『初等支那語教科書』（一九三六―一九四〇年発行、全五巻）と比較してみると、きわめて「画期的」な教科書であることが素人目にもよく分かると思われる（末尾の図版Aおよび

図版Bを参照⁽¹⁴⁾。

図版Aで見ると、この教科書の巻一（小学校第四学年用）と巻二（同第五学年用）は挿し絵だけで全く文字がない。巻三（小学校第六学年用）も挿し絵だけで文字はないが、注音字母で発音が表記されている。そして巻四・巻五（高等小学校用）になってはじめて挿し絵とともに課文が掲載されるのである。

「稿本」は日本語による説明や文字を通しての翻訳などによらず、直接法によって中国語を教授するための教科書である。巻一で学校生活を主な教材としたのは、初めて中国語を学ぶ子どもに「示してみせる、させてみる」などの行動と合わせて言語を使わせるための便宜からと思われる。このような直接法は台湾など植民地での初等教育で日本語を教える際に実際に採用されていたし、またこれは当時行われていたパーマーの英語教授法にも関連があるように思われる。巻一冒頭の「一」の教材は「站起来（起立）・行禮（礼）・坐下（着席）」で、教科書には男の子がこれを行っている場面の絵だけが掲載されている（巻一「四」では教師が同じ場面の掛け図を鞭で指しながら授業する絵になっている）。起立・礼・着席は日本の学校でもっともありふれた

常軌的活動であり、当時直接法による英語の授業の教材にもされてきた。戦時下の中学校英語教科書にも同じ趣旨の教材が掲載されている。

語学的な問題はさておき、まず教材の社会的性格を見ると、この教科書が満洲事変・満洲国建国以前に編纂された教科書であることからくるいくつかの特徴を指摘することができる。この教科書の教師用書は「支那語八発音ノ困難ナ言語デアル。発音ノ指導力不完全デアツタラ……半バ以上失敗」というような教授上の諸注意と並べて、次のようなことを指摘している。

「教室ノ空気ヲ支那語化シ、支那語ニ対スル親ミヲ深クスル」

「絵画（挿し絵）ハ、主トシテ支那ノ事物……児童ニ支那事情ノ一端ヲ知ラセルト共ニ、郷土ニ親マシメヨウトシタ」

「教室ノ空気ヲ支那語化」するとは「原則トシテ母国語ヲ使用セズ、支那語ノミテ教授スルコトヲ常ニ念頭ニ置クことを指している。そして「教室デノ作業ヲ支那語化ス

ル第一歩」として、「站起来」「行礼」などを実際にさせながら教える、直接法による教授法である。これらはさりげない言い方ではあるが、中国人を「日本化」しようとするのとは逆に、日本人の子どもを「支那化」しようとするものと受け取りうるだろう。ここでは「郷土」とははっきり中国的なものとされている。また「支那語八発音ノ困難ナ言語デアル」として、普通なら「言語」というべき箇所をわざわざ「国語」といつているのは、満洲事変前であるから当然とはいえ、日本人にとっては日本語が「国語」であるように、中国人にとっては中国語が「国語」なのだということをはっきり示しているといえよう。

この教科書を巻一から順に見ていくと、巻三までは日本的なものはほとんど出てこないで、もっぱら中国人の生活を対象にしているのように見える。

まず巻一は十一課で中国人家庭の食事風景の絵が出てくるのを除けば、全部が学校の場面である。男の子の習字の手本が「天地玄黄……」（千字文）だったり、絵を描いている女の子の服装が中国服だったりするところから、この子どもたちは中国人らしい。九に出てくる「飯盒児」（弁当入れ）なども日本のものとは違うようだし、十三課・十四

課の登下校時や校庭で遊ぶ子どもたちの服装も中国的である（男の子の服装は日本の子どもとよく似ているが長ズボンである。当時の日本では通常短ズボンでストッキングを履くのが男子小学生の標準の服装だった。実際改訂版の巻三には中国人の男の子と日本人の男の子がそういう対照的な服装で話をする場面がある）。

ただし一応中国人の学校ではあるが、先生がいかにも日本人のことから、日本側が経営していた中国人のための学校（公学堂）をモデルにしているように思われる。だから中国人をモデルにしても完全に中国的なわけではない。緒言でいうように本当に「支那事情」を教えようと思つたのなら、典型的な「支那の学校」 中国人が経営する中国人の学校 をモデルとすべきではなからうか。中国的なものに入れても及び腰だということになる。この姿勢は巻が進むにつれてだんだんはつきりしてくる。

巻二は学校の場面もなくはないが、図版Aで見ると、主に「家庭・自然・社会」に教材を取っており、それがすべて中国人のそれになっている点が目立つ。¹⁵ その意味ではいちばん中国人や中国社会に接近しているとも言える。日本人用の教科書としては精一杯の「支那化」というところ

か。在満日本人用の教科書全体を通じて、これほど「支那化」した教科書はほかにはない。

巻三は教師用書では「自ら学校教材が多クナツタ」と言っているが、実際にはそれほど多くなく、やはり中国人の家庭や社会／自然などの場面が教材の中心になっている。

巻四と巻五では文字（文章）が出てくるが、ここでも学校場面は少なく、いわゆる「常識材料」と「社会材料」が多くなっている。ただし大体が中国人社会に材料を取っているが、時々日本人も登場するようになる。日本人が買物をする、ボーイを雇う、中国語を学ぶ、などの場面である。日本人と中国人の関わりが出てくるとも言えるが、関わりといっても日本人の側から中国人の生活を覗いているのであり、その生活も表面的で浅いものだと見える。なお小さなことだが、巻四・巻五の挿し絵は巻三までと画法が違っている。

この教科書の語学教授上の問題点として那須清は次の四点をあげていると¹⁶いう。

一、取材があまりにも学校生活に偏し、児童を中心とする社会一般日常必須の教材に乏しく、為に実用の

妙味を味わうことができなかつた。

二、絵画のみの教科書は、学習の結果を復習すること
を困難ならしめた。

三、(巻三からの「引用者注」) 注音字母は大きな負担で、
あつてなきが如く、かえつてじゃま者扱いされる。

四、語学教授の本質から見れば、その編纂の方針は理想に近いものであつたと言えよう。しかしこの理想的学習教科書が、實際家の歓迎するところとならず、改訂のやむなきに至つた根本の原因は、教授者の実力を考慮に入れず又教授時間の寡少なのを無視したからである。

語学教授上の問題点について論評する資格は筆者にないが、一の「取材学校生活に偏し」というのは巻一だけの特徴で、巻二以下にはあてはまらないように思われる。しかし中国語の入門期にもっぱら学校生活だけを対象として一年間通すのは、確かに単調さを免れなかつたかもしれない(教科書の絵が日本人の学校ではなく、公学堂の中国人の子どもの生活になつてゐるのは、場合によっては子どもに興味を引いたかもしれないが)。日本でも大正期以後の私立小学校の

上学年では英語教育を行うところが多くなつたが、その多くは会話中心で生活活動や絵などを基礎的な教材としていたよつである。その点ではこの「稿本」に通ずるものがあるように思われる。ただ小学校の英語授業では教材としてよく歌やゲームが用いられてきたが、この教科書にはそういう配慮は見られない。また英語の時間にはジョンやメアリなどの名前を付けて子どもたちを呼び合うようなこともよく行われているが、中国語学習の場合そんな演出をして自分たちを中国人の子どもたちの生活と結びつけるようなことが果たしてあつたらうか。

那須清が指摘する二は、特に授業に欠席した場合が問題だつたらうと想像される。

四はもつとも本質的な問題であろう。当時中国語を教えられる日本人の教師は東亜同文学院の卒業生、満鉄教育研究所での研修を受けた者などであつたとされる。そのほかこの教科書が企画された当時、そついつ画期的な授業にも耐えられるような、中国語の堪能な初等教員を養成する満洲教育専門学校が創立されている。実際当時の満洲で小学校に在学した人に聞くと、「満専」出の先生と内地の師範を出た先生とでは、中国語の実力が全く違つていたと

い¹⁸う。だが満洲教育専門学校はこの教科書が全巻完成した翌年（一九三二年）に廃止が決定され、一九三三年に廃校となっている。この教科書が中国語教育の実験的試みとしての成果をあげないで終わった背景には、そういう事情があったことも考える必要があるように思われる。

五 「稿本」と『中国文教科書』を比較して

「稿本」は巻一教師用書の「緒言」でいうように「支那事情ノ一端」を知らせる教科書だった。しかし、榎木瑞生はこの教科書について次のように指摘している。

「稿本」は来客・理髮匠・兄弟・中秋節・唱歌・来信・司馬光（以上巻四）・学中国話・打電話・運動會・雙十節・車中會話・修理鞋（以上巻五）などの課があるが、（これらは一見中国的な装いはしていても）その多くは日本人の生活にも見られるもので、中国独自の生活を教えるものになっ
ていない、強いて中国事情を語るものを挙げると、中秋節・司馬光・雙十節・鋪蓋ぐらいのものではないか。したがって中国語の教育が真に伝えるべき中国事情の教育になっ
ていない。ところがほぼ同じころにやはり南滿洲教育会

教科書編輯部が編纂した中国人用教科書、滿鉄附屬地の公学堂用『中国文教科書』巻一〜十二（一九二四〜一九二九年発行）は、巻一（小学校第一学年用に相当）の第一課に「青
天白日滿地紅尔看我們的国旗好光明」（青天白日旗。私たちの国旗はとても明るいでしょう）という文が載っている。また巻十二（第六学年用に相当）には二課にわたる「中山先生
事略」という課で中国の国父孫中山（孫文）について述べている。しかもその課の後には「独立自尊」という課があり、中国の独立を説いているのである。中には「福沢諭
吉」（巻十一）のような日本にかかわる教材もあるが、当時
もっとも大きな問題であった中国の独立や三民主義が、中
国人用の教科書に入ってきているのに、こういう内容は全
く日本人の学ぶ中国語教科書には載っていないのである。
日本人向けの教科書がごく平凡な日常的な生活しか語らな
いのに対して、（中国人用の教科書は）一歩、二歩踏み込ん
だ内容を伝えているところが両者の間の大きな差である、
と榎木はい¹⁹う。

実は中国人用教科書にこうした教材を加えるということ
は、当時南滿洲教育会教科書編輯部内での大問題であった。
「支那に於ける軍閥争覇の二十数年の戦乱も、昭和二年孫

文の衣鉢をつぐ蒋介石の南北統一によつて漸く終熄の色を見せ、東四省の他にも国民革命軍の青天白日旗が翻り、民族主義を高唱し、利権回収の排外教材を内容とする三民主義の教科書が滔々として流入する情勢となつて、附属地に於ける滿人教育は愈々その影が薄くなり、このまゝで進めば公学堂も放棄しなければならぬといふ（非？）観論さへ唱へられるに至つた。（中略）時勢の潮流は遂に州外「關東州外」公学堂教科書中にも孫文、青天白日旗等の教材を加へなければならぬことになつたのである。⁽²⁰⁾

つまり孫文や三民主義を中国人用の中文教科書に載せたのは、やむを得ぬ苦渋の選択だつたということになる。これが日本人用の教科書に載らないのは当然であろう。田中はこの文の直後に「昭和六年二月に開かれた第五回評議員会に於て特に問題となつたのは三民主義を教科書に取り入れるか否かといふことであつた」として、激しい論争の後、「三民主義を採用し編纂するに就ては特に注意を払ふべきものとす」という議決がされたと述べている。⁽²¹⁾三民主義を載せた『中国文教科書』は既にこの会議の前（一九二九年以前）に発行されているから前後のつながりに疑問が出てくるが、ここで三民主義を入れることが問題になつたのは

おそらく修身の教科書であつて、中国文教科書のほうはあまり問題にならなかつたが、あるいは緊急避難的に急遽入れたのかも知れない。

問題はこれだけではない。ここで槻木が取り上げた「稿本」巻五は一九三一年六月発行の再版であつた。ところが滿洲事変のあとこの教科書は一部の教材が差し替えられたのである。一九三四年三月発行の第四版を見ると上の「雙十節」が「重陽節」に変わつている。また「端陽節」（日本でいう端午の節句）の挿し絵にあつた「青天白日旗」が「滿洲国旗」に換えられているのである。これは滿洲事変以後に変わつたものと思われる（『在滿日本人用教科書集成・第8巻・支那語教科書』では一九三四年版の教科書の本文が「重陽節」に変わつているのに目次では依然として「雙十節」のままであるかのように見えるが、これは復刻の際の出版社の資料の取扱いミスによる可能性がある）。

滿洲事変＝滿洲国成立後はこうした事情が非常に変わったのはいうまでもない。「反滿抗日的教材を含むもの」や「社会主義的教材を含むもの」はもちろん、「三民主義的教材を含むもの」、さらには「支那的教材を過多に含むもの」さえも教科書としては使えなくなつたからである。⁽²²⁾こつし

て見ると満洲国での中国人用教科書としては、使用された教科書の例よりもむしろ、「どんな教科書が認可にならなかつたか」を見るほうが重要かもしれない。

「雙十節」と「重陽節」の本文を比較してみよう(二七ページ参照)。

満洲事変前はともかく満洲は「貴国」中華民国」の一部であり、中国人は十月十日の建国記念日を最重要な国家記念日として祝うのだということを紹介している(言い換えれば満洲は外国だと認めているのである)。また教師用書の「注意事項」では「十月十日八所謂武昌起義ノ日」テアル。其頃孫文八革命党ノ首領トシテ同志ヲ翕合シ清朝ヲ倒シテ民国ヲ建設シヨウトシテオタ。……」とその由来を解説している。⁽²³⁾ところが事変後はこれを「重陽の節句」に変え、内容をその日に高いところに登るといふ中国人の習俗にしてしまったのである。「青天白日旗」が「満洲国旗」に換えられたのも同工異曲である。事変後最初に発行されたと思われる第三版は未見であるが、この時に修正されたのであろうと推定できる。なおこの程度のこととは応急修正で「改訂」とはみなされない。これは『満洲補充読本』などでもあったことである。

六 もっともよく知られた中国語教科書

『初等支那語教科書』(改訂版)

この教科書は先の『稿本・初等支那語教科書』の改訂版であるが、巻一(第四学年用)が一九三七(昭和一二)年度から一九四三(昭和一八)年度まで七年間使用されている。昭和十年代に満洲で小学校に通った子どもはほとんどこの教科書で中国語を習ったことになる。在満日本人の子ども数は「稿本」時代よりも増加しているので、この「改訂版」で学習した子ども数は「稿本」よりもずっと多かつたろうし、特に巻一はその内容の覚えやすさのためか、同時代に満洲の小学校で学んだことのある人たちにその内容がよく記憶されている教科書である。

新京室町在満国民学校で一九四一年四月からこの「改訂版」巻一で中国語を学んだという人が「満洲在住の子供にとって日常会話としての支那語ぐらいは耳学問によりマスターしていたが、教科書に基づく本格的な学習は初めてであった。(この教科書の)出だしは丸暗記していて、今だに口ずさんでしまう。これは(当時)小学校に入学して先ず教えられた「サイタ サイタ サクラガサイタ」の「小学

雙	華	成	明	敵	念	教
爲	民	立	慶	紀	因	

十六 雙十節

今天爲甚麼掛旗子哪
 是雙十節
 雙十節是甚麼日子
 中華民國成立的日子
 啊 我明白了 就是貴國國慶日罷
 不錯 是敵國第一的紀念日
 這名兒是怎麼起的
 因爲十月十號 所以叫做雙十節
 領教領教
 好說好說

(訳)

今日はなぜ旗を掲げるのですか
 雙十節です
 雙十節とはどんな日ですか
 中華民國が成立した日です
 ああ わかりました つまりあなたの国の建国記念日です
 すね
 その通り わが国で一番大事な記念日です
 どうしてこの名(雙十節)になったのですか
 十月十日ですから それで雙十節というのです
 たいへんいいことを教わりました
 どういたしまして

重	梅	災	九	酒	詩	趣
登	苑	難	數	作	味	

十六 重陽節

今日は甚麼日子
 是重陽節
 爲甚麼滿洲國人都登高哪
 傳說登高可以免災難
 怎麼叫做重陽節哪
 因爲是陰曆九月九日 日月都是陽數
 所以叫做重陽節
 重陽節竟登高嗎
 不 也有人在山上喝酒作詩的
 啊 那倒是很有趣味的

(訳)

今日はどんな日ですか
 重陽節です
 滿洲國の人はどうして高いところに登るのですか
 高いところに登って災難を免れるのだという言い伝えがあります
 どうして重陽節というのでしょうか
 陰曆の九月九日ですから 日月も陽数です それで重陽節というのです
 重陽節には高いところに登るだけですか
 いいえ 山の上でお酒を飲んだり詩を作ったりする人もいます
 ああ それはとても優雅なことですね

『国語読本』と全く同じである」と語っている。当時室町在満国民学校には宮原正治という「支那語の専科教員」がいて、「北京官話の基礎を叩き込んでくださった」というから、学習効果はかなりあがっていたのである²⁴。ただしこれが当時の満洲の小学校における普遍的な状況であったかどうかはよくわからない。

この教科書は巻二（一九三六年）が巻一（一九三七年）より先に改訂されている。したがって巻二は巻一より二年以上長く使用されることになった（おそらく在満日本人教育が終焉を迎えるまで使われたのではなからうか）。

なぜ巻二のほうが巻一よりも早く改訂されたのか。教材となる生活場面を見ると、図版AとBの比較でもある程度推測できるように、巻一は「稿本」ではもっぱら学校場面だったのが、改訂版では多様な日常生活の場面へと全く変わっている。これに対して巻二は教材の生活場面に共通しているものが多いのである。したがって学習されるべき文に共通なものが多く、改訂しやすかったのだらう。「稿本」巻二（教師用）の教授事項と「改訂版」巻二の本文を比較してみると、農家だったのが都市の住宅になったり（五と第五）、電灯の下で勉強しているのが中国人の女の子から

日本人の男の子に変わったたり（六と第八）、道を歩いている人々の服装が中国的でなくなる（八と第七）というような違いはあるが、多くの課で両者に共通する教材の多いことがわかる（二九ページ参照。*を付けた課は主題が変わったもの）。

この教科書は課ごとに本文と挿し絵を対にして構成しており、一見して常識的な語学の教科書である。また末尾の「新字表」では、発音表記に「稿本」が退けたカナを使用しており、さらにそこに掲載された「語彙表」に単語や文章の訳を掲げている。したがって発音を別にすれば、この教科書だけで自習することも可能な形式になっている。

この改訂について竹中憲一は、

- 1 最初から漢字によって教材を提示した
- 2 注音符母表記から宮越式の仮名表記に転換
- 3 教室用語から生活用語という方向
- 4 文法・構文の配列が整理されている
- 5 会話の形式が『急就篇』の一問一答、二問二答の短い問答からなる

6 言語主体が中国社会を背景とした中国人からほと

「稿本」巻二(教師用)の教授事項

「改訂版」巻一の本文

- | | |
|--------------------|-----------------------|
| 一 早起/起来/刷子/嗽口: | 第一 早起做甚麼/刷子/嗽口: |
| 二 天氣(中国人の庭での人の様子) | * 第二 禮拜(曆を前に曜日や日付を語る) |
| 三 春天/暖和/杏花児/桃花児: | 第三 春天/暖和/杏花児/桃花児: |
| 四 池子有鴨子/水裡有鯉(田舎の池) | * 第四 公園(都会の公園の噴水) |
| 五 房子/院子/牆/傍邊兒有樹: | 第五 房子:傍邊兒有樹 |
| 六 晚上/黒/電燈/亮: | 第六 夏天/天氣熱/海邊兒/人很多: |
| 七 夏天/天氣熱:海邊兒/人很多: | 第七 下雨:不好走/街上人少: |
| 八 大雨/道兒不好走/街上人少: | 第八 晚上:天黑了/把電燈開了: |
| 九 眼睛/鼻子/耳朵/嘴/都在臉上: | 第九 身體/有眼睛/所以能看/有耳朵: |

(以下略)

(以下略)

んどが日本人に

の六つの点をあげている。⁽²⁵⁾ 3は巻によつて違つて違つてではないかと思われるが、語学的な問題については筆者もこの指摘に同意するほかない。要するに「改訂版」は生徒の負担や不安を解消する側面が大きかつたという点が重要であろう。若干付記するとすれば、竹中は2で、注音字母を採用し

なかつたのは満洲国の言語政策に抵触するという考えがあつたからと考えられる、という。確かに編集者間にそうした時局への迎合がありえたかもしれない。しかし当時よりはるかに情勢の厳しくなつた一九四二年の国民科大陸事情及満語の教師用書に、カナと併記して注音字母をもちいて「満語」(中国語)の発音を示した箇所がある。⁽²⁶⁾ いずれにせよ発音は教師による適切な指導がなければ向上しなかつた

ろつ。まして日常生活の中で聞き覚えた不正確な発音を常に矯正しなければならぬような環境ではなおさらのことと思われ⁽²⁷⁾る。

ただしこの教科書によって直接法が全く退けられたというわけではないようである。⁽²⁸⁾教師用書の「緒言」では「必ずしも文字に拘束される必要なく、又児童にこれを強制する必要はない」としている。これは中国語を学ぶ目的が日常生活に必要な会話を学ぶことであり、教材の内容も「児童を中心とする社会一般日常必須のもの」を「網羅」したものだからであると思われる。また課の内容によつては、例えば巻三の「第二 打掃」(教室の掃除)などは「実物教授、直観教授をなすに、最も都合よき教材なれば、十分に直接法教授の真価を發揮したいものである」といつており、本文の教授においても直接法を用いることもありうることを示唆している。

右の6の点について竹中は「英語の教科書などにはあまり見られないことである」といつている。⁽²⁹⁾確かに英語の教科書の場合、戦時下に編纂された中等学校用の教科書は(特に第一学年用は)登場人物がほとんど日本人になつてしたが、それ以前の段階ではそういうことがなかつたかどう

かについては筆者は未確認であるし、語学の教科書は教材をその言語の話されている人々や社会に取材すべきなのかどうかについても発言する資格がない。しかし「満州にふさわしい何か」を加えるための他の教科書、例えば国語の副読本『満洲補充読本』などと比べてみることは無意味ではないように思われる。

『満洲補充読本』は特に昭和十年代に入つてからの改訂により異民族・異文化の面が相対的に薄くなつていく。⁽³⁰⁾これに比べると同時期改訂の「初等支那語教科書」には、確かに「稿本」よりはずっと満洲における日本人の生活が主体になつているとはいえ、『満洲補充読本』よりは中国的なものがまだ多いといえる。少なくとも日本的なもの・軍事的なものとはほとんど入つていない。

巻一の教材に出てくる生活場面を見ると、学校生活のそれはわずかで、野外あり家庭(日本人の家庭への中国人の訪問と中国人の家庭での食事風景)あり、路上や街頭(商店)ありと多様になつているが、確かに日本人の生活場面が中心となり、中国人は時々顔を出す程度になつたのである。「稿本」と同じ中国人を中心とした教材は「第十 父親/母親/哥哥/妹妹……(父/母/兄/妹)」「中国人の家庭の

食事風景の挿し絵)だけになっている(「稿本」では十一)。

その一方で、「稿本」にはほとんどなかった日本人と中国人との交流の場が登場している。「二 来了麼/来了/走了麼/走了/快走/慢走」(巻末の「語彙表」に、来ましたか/来ました/行き「かへり」ましたか/行き「帰り」ました/早く行き「歩き」なさい/ゆっくり行き「歩き」なさい、との訳がある)の挿し絵を見ると、日本人の男児と中国人(中国服を着た)男児とが手を取り合って走っている場面が描かれている。

「五 好不好…六 要不要…(良いですか/要りますか)」では日本人の家庭の座敷に、中国人の友人らしい男・女が客として座っている(中国人の男性は窮屈そうに正座している)。在満日本人が日本人同士固まって生活していて、回りの他民族とは交渉が非常に少なかったことの反映とも見られよう。また満洲の主人公が日本人になったのということ、いわゆる「民族協和」を日本人を中心として描いて見せたという解釈もできよう。満洲事变「満洲国建国」という歴史的变化の上でこの改訂を見ればそういうことになる。巻二もほぼ同じである。日本人の生活を主体として、そこへ中国人がたまに入ってきたり、あるいは買物などで

中国人と接したりする機会があるが、日本人が中国人の中に入っていく場面がない。もっともこの点は「稿本」も同じであったし、さらに『満洲補充読本』もそうであった。巻二では「第四 公園」に中国人の一家らしい両親と子どもが見えるし、「第五 房子」には「親戚の王先生」が住んでいるという中国風の家が登場する。しかしこれらの課はむしろ例外であって、大体初歩の教材にはそこにはつきり中国人が登場するとわかるものが少ない。

巻三は巻頭に満洲国歌が載っており、中国人の様子を紹介するような内容の課が俄然多くなる。「第三課 春天的景致」は農村風景であり、「第四課 訪問」は日本人の男の子が中国人の家を訪ねる場面になっている。第五課・第六課では旅行中の日本人がホームや車中で中国人と会話を交わす。第七課は中国的な露店風景だし、第十二課は子ども二人が馬車の馬丁と値段の交渉をする(値切る)場面である。「第十三課 比一比(比べてみる)」・「十四課 問答」・「第十六課 新年」は中国人同士の生活を描いている数少ない課である。「十七課 語學」は日本人の男の子と中国人の男の子との会話で、「您會說日本話麼/會一點兒不多…我說的滿洲話對不對/您說的很好(あなたは日本

語が話せますか／少しできます。僕の満洲語はどつかしら／君の話し方はとても上手です」と、中国語を「満洲話」にしてしまっているが、内容的には一応日本人と中国人が互いに相手の言葉を学びあう形になっている。小学校で三年間学べばそのくらいの会話はできるようになるはずだということであろう。そして「第十八課」で「快卒業」（もうすぐ卒業）となるのである。

巻四と巻五は高等小学校用になるが、巻五では例の雙十節に替わって入った重陽節が消えている。それに対して同じく年中行事の端陽節と中秋節は残っている。これは日本の端午の節句やお盆に相当する行事だから残したが、重陽節に相当する重陽の節句は日本人の年中行事から姿を消していたからではなからうか。この辺にも日本人を主体とした教材編成であることが反映している。

七 他民族支配のための中国語学習体制の到

達点 「国民科大陸事情及満語」における中国語教科書

一九四一（昭和十六）年、満洲でも国民学校実施にともない中国語教育も大きな変換をとげる。在満・関東国民学

校では従来の「支那語」は「満語」と言い換えられ、しかも独立した科目ではなく、「満洲及び東亜に関する事情の概要」と「簡易なる満語」を内容とする新科目「国民科大陸事情及満語」の一部となったのである。「大陸事情」との「抱き合わせ」になった「簡易なる満語」の目的は、「満語の習得によって大陸の事情を深く洞察し、満人の生活・習俗・思想などを理会するとともに、日満両民族の意志の疎通を図り、物心両面の生活に利便あらしめ、更に満語を駆使して大陸における皇国民の使命遂行に資する」ことにある。完全に他民族支配のための道具としての中国語教育となったというよりも、これはもはや「本来の意味での外国語教育ではない」。

このように在満国民学校においては、「満語」は独立科目でなくなったが、同時に第一学年から「大陸事情」の時間に折にふれ学習することになっていた。すなわち第三学年までは独立した教科書を用いず、「教材中に適当な満語を取入れる建前」で、「日常聞きなれてゐるもので、満人の風俗習慣をつかがひ知るに便なるものを選択する」としている。したがって語数も少なく、系統性もない。発音は「五十音を以てつとめて原音に近い発音を表はすことにし

てゐる」。この段階では「満人の生活を児童の身近に感じさせ、満語を学びたいといふ学習意欲の喚起」になればいいのであって、「発音の訂正を厳にする必要はない」が、「教へる以上……正しい発音を聞かせるやうに注意すべきで、そのために「注音符号を提出してこの便に備へておくのだ」といふ³³⁾。第四学年からは「満語」を週一時間教科書で学ぶようになるのであるが、それまでにある程度の基礎ができていることを前提としていることになる。

その内容は「児童の起居動作や素朴な思想感情を表はし、児童の身近な生活環境の事物現象を表はすものがその内容となる。随つて話しことばが中心となり、日常の用務を弁じ得る必須語が要求されるのであるが、満人を理解する上に必要な満語は、簡易なる範囲に於いて当然含まれるわけである」といふ³⁴⁾。

第一学年から周囲の環境に取材しながら、外国語を折にふれて指導するというのは画期的なように見えるが実際にはどうだったろうか。教科書中で実際に「満語」の取扱いは出てくるのは、『マンシウ一』では、「八 マンシウノノリモノ」(洋車・馬車)、「十一 ナキコマ」(鳥・雀・鶏・牛・鼠・猫の名称と鳴き声。他に教科書に出ていないものとして、

豚・汽車・胡弓・鳩・赤坊・雷を例示)、「十二 マントウ」(饅頭)、「十七 タンホウル」(糖葫蘆児)「木の实などに糖衣をつけた菓子)、「十八 ハネケリ」(一個十個)の数詞)などの課で括弧内の単語を指導することを求めている。

ところが『まんしう一』では「指導の要点」ではっきり「満語〇〇を授ける」としているのは、「三 タコアゲ」(好好)、「七 マンシウヒバリ」(百霊)、「八 まちの人」(衣装)、「十一 ヌエピン」(月餅)、「十五 まんしうの家」(パオ)、「包」)、「二十 かまど祭」(餃子)などに過ぎず、第一学年よりもずっと少ない。まさに教師用書自ら断つていふように、「系統性もない」もいふところである。

第三学年の『満洲三』では教師用書がないのでどの課でどのようにして「満語」を指導するつもりだったのかよくわからないが、課の内容を見ると「満語」指導にふさわしいのは、せいぜい「五 ニヤンニヤン祭」(ニヤンニヤン)「娘娘、ミヤオ」(廟)、「十二 りんご園」(ニライラ)「你了、ザイエン」(再見)、「十八 しゅんれん」(シンシンシン)「新禧新禧」などにすぎない。

『初等科満語 第四学年』はこれまでに存在が確認されている唯一の「満語」教科書である。使用された時期がこ

く短いのでほとんど成果はなかったのではないかとも思われるが、全三一頁で十三課からなり、前半が日本人の学校生活、後半が「満人」の家庭生活を舞台とした会話的構成になっている。付録に短い歌が二曲ある。在満日本人小学校用の正規の中国語教科書に歌が入ったのはこの教科書しかない。

改訂版『初等支那語』が大体において日本人の生活を舞台とし、ところどころに中国人との交渉や中国人の家庭・習慣などを挿入しているのに対し、この教科書は前半で日本人の生活場面を、後半で中国人の生活場面をそれぞれをまとめたような形になっている(図版C参照)。ただし中国人の生活場面といっても、挿し絵の服装や家の様子などからそのように推測されるというだけのこと、会話の内容に中国的なものは何も出てこない。例えば、姉が「みんなお出で／花が開きましたよ……／早くお出で……」と呼ぶので、兄弟みんなで花を見に行ったとか、姉と妹が居間で歌を歌うのを両親が聴いて、上手だとほめるとかいった類いの内容である。中国人の風俗習慣に親しみを持たせるためかもしれないが、中国服を着た日本人を登場させたような感じさえる。

もつともこの時期には朝鮮や台湾では、現地民族の子どもたちが学んだ教科書からさえ民俗衣装などはとうに姿を消していた。それに対して在満日本人のための教科書には、この時期になつてもとにかく異民族の衣装が見られたということ、やはり満洲の教育の特徴であると言えないこともない。ただし改訂版『初等支那語教科書』には多少なりとも日本人と中国人との交流があつたのに対し、この教科書には日本人と中国人との交流場面は存在しない。

教材としてはこれまでの基本的形式である問答体を取り入れているが、「我 是 学生」「先生 来了」など冒頭から主語のある文になっている。また分かち書きをしたり、会話などでは引用符号「」が用いられ、句読点は使われないが、「はい」の意味の「是」の場合に限って句点(、)を入れるなど、低学年国語教科書の表記法を模しており、日本の国語教科書の印象に近いものとなっている。また発音表記がなく、新字表・語彙表もないので自習・復習には不便であつたと思われる。

語学的なレベルとしては、週一時間だから当然ともいえるが、この『初等科満語 第四学年』は明らかに改訂版の『初等支那語教科書』の巻一よりも低下したといえよう。

またこの教科書が発行された一九四四年にはまだ五・六年用はできていないので、五・六年用の「満語」の授業では従来の改訂『初等支那語教科書』を利用していたはずであるが、この年度には『初等支那語教科書』は巻二しか発行されないことになっていた。⁽³⁶⁾これは従来第六学年で巻三まで学習していたのを、巻二までしかやらない（あるいはできない）ことになったということではなからうか。「国民科満語」は「大陸事情」との抱き合わせによるイデオロギー重視の反面、肝心の語学的な面が軽視されていたといふしかない。野村章はこの事態を『満語』は『満洲国』を一層日本化する手段に過ぎなかった」と評している。⁽³⁶⁾

これが在満日本人小学校での長年の中国語教育の最後の到達点だった。抱き合わせにされた相手の『初等科大陸事情・第四学年』（一九四四年）の教科書がすさまじいばかりの軍事教材・皇国民教材に充満していたのに対し、同学年の「満語」の教科書のほうは確かに教材そのものは、軍国主義や皇道主義とはかかわりのない平和なものであった。しかし幣原坦が懸念したような「ミイラ取りがミイラにならない」ための配慮は、在満日本人小学校の中国語教科書においては一貫して進行し、最終的にはこのような形で実

現したのである。

付言：「満洲」や「満洲国」などには本来引用符を付すべきであるが、本稿では略したことをお断わりしておく。なお本文中では敬称を省略した。「稿本」巻五の教材差し替えに関しては、資料の面でお世話になった同朋大学の槻木瑞生教授にお礼を申し上げたい。

注

- (1) 現地適応主義については、拙著『皇国の姿を追って』教科書に見る植民地教育文化史』、皓星社、一九九九年、二六頁以下。竹中憲一『《満洲》における中国語教育（1）』『人文論集』第三二号、早稲田大学法学会、一九九四年二月などを参照されたい。
- (2) これらの教科書のうちこれまで発見されたものについては、磯田一雄・竹中憲一・槻木瑞生・金美花編『在満日本人用教科書集成』（全十巻、柏書房、二〇〇〇年）に復刻されている。
- (3) 拙論『《内地延長主義》対《現地適応主義》』在満日本人教育における補充教科書開発の論理』、『成城大学文芸学部創立四十周年記念論文集』一九九四年四月。
- (4) フランスが仏領インドシナで自国民の子どもたちにベトナム語を教えたというような例はある。

- (5) 幣原坦『滿洲觀』、一九一六年、六四 六五頁。
- (6) 同書、六六頁。
- (7) 伊豆井啓治「滿鉄附屬地に於ける日本語学校の創設」に一九二二年に行われた日語学堂設置方法に関する諮問案に対する答申に、次のような意見が掲載されている。
- 飽くまで滿洲に於ける殖民者たる日本人は土人其者よりも支那人より優れる者であると云ふ觀念がなければ勝利を得ることは出来ませぬ。日本人は殊に他國人に感化され易い人間でありますから先づ之を強くさせる為には支那人兒童とは離して日本人に獨立心を益々強くさして置く必要がある。
- なおこの発言者(公主嶺公学堂長大河平)は、中國人のことを「支那人の如き同化の仕難い何処へ行つても彼等の性質を変更し難い國民」とも言っている。『滿鉄教育たより特輯・滿人教育』、滿鉄教育研究所、一九三六年一一月一五日。
- (8) 本稿「五「稿本」と『中國文教科書』を比較して」参照。
- (9) この点については竹中憲一「前掲論文参照」。
- (10) 竹中憲一「支那語教科書」の「解題」参照、前掲『在滿日本人用教科書集成・第10巻・教育関連法規・解題』三二七頁。
- (11) これらの教科書は前掲『在滿日本人用教科書集成・第8巻・支那語教科書』に収録されている。
- (12) 滿鉄学務課では一九二五年三月、小学校に中国語科加設ノ件」という通牒を出したが、この中で従来支那語と言っていたのを中国語に改めている。公文書の中で「中国語」という表現が使われたのがこれが初めてではないかという(竹中憲一、前掲「滿洲における中国語教育(1)」)。
- (13) 野村章「滿洲・滿洲国」教育史研究序説・遺稿集、エムティ出版、一九九五年、五六頁。
- (14) 実際にはこの教科書の前に昭和二年三月刊行の『初等支那語教科書 上巻』が発行されている。これは翌年『稿本・初等支那語教科書』の刊行と同時に廃刊となった。この教科書の内容は不明であるが、昭和二年四月刊行の高等小学校および中等学校用の『稿本・支那語教科書(上・下二巻)』はこの教科書上巻の挿し絵を基として作成したという。この高等小学校および中等学校用の『稿本・支那語教科書(上・下二巻)』には上巻のみに挿し絵があるが、完全に中國的なものになっている。学校には「金州公学堂」と読める看板がかけられて、教師も中国服を着ており、買ひ物の場面も中国人同士になっている。中国人の子どもと日本人の子どもが出会う場面以外には日本人は登場していない。なおこの教科書の下巻には挿し絵がない。
- (15) 竹中憲一は「巻一・巻二の内容は学校生活に関することが多く」といつている(前掲『在滿日本人用教科書集成・

第10巻・教育関連法規・解題』における「支那語教科書」の解題。同書三三〇頁）が、これは若干不適切である。正確には「巻一はほとんどが学校生活に関すること、巻二はほとんどが（中国人の）日常生活に関すること」とすべきである。

(16) 那須清『旧外地における中国語教育』一九九二年、竹中憲一前掲書解題よりの再引用（同書、三三三―三三三頁）。

(17) この教科書も巻四と巻五には一曲ずつ中国語の唱歌があるが、これは高等小学校用である。在満日本人用の中国語教科書で尋常小学校に相当する学年に歌が登場するのは、その最後の段階、一九四四年発行の『初等科満語 第四学年』においてである。

(18) 大連の高等女学校出身の野田美都里氏は筆者等の聞き取りに対して次のように語っている（一九八九年六月一日）。「中国語教育では満洲教育専門学校出身者と内地から行った人との差が大きかった。（内地から赴任した先生は）ちょっと講習をやる程度で、それでは通じなかった。内地から行った人はカタカナで教えていたから。（中略）必修にしたら絶対中国語教員が足りない。それで大体担任の先生がやっていた。満洲教育専門学校出身者は、東京外語から行った秩父固太郎が満鉄の中国語の中心人物で本当に鍛えられている。内地から行った先生にはとても無理だったと思われる」。

(19) 榎木瑞生「解説・在満日本人教育の歴史」、前掲『在満

日本人用教科書集成・第10巻・教育関連法規・解題』一〇頁。

(20) 田中俊資「満人用教科書の編纂沿革に就て」『満鉄教育たより』昭和十一年一月二十五日、五八頁。

(21) 同書、五九頁。

(22) 文教部編審官室「教科書審査報告書」、康徳二（一九三五年）一月一日。

(23) 『稿本・初等支那語教科書』巻五・教師用、三六―三七頁。

(24) 戸出武「懐かしい支那語教科書」『室町』第6号、新京室町会、一九九五年九月。

(25) 竹中憲一、前掲「支那語教科書」解題、前掲『在満日本人用教科書集成・第10巻・教育関連法規・解題』二三四―二三六頁。長文にわたるので引用者が要約してある。

(26) 野田美都里氏はこの点について次のように語っている。「国民学校になってからは、一、三年生にも適宜「満語」を教えることになっていった。教師用書には本格的な発音符号（注音字母）が載っている。あれは内地から来た先生には大変だった」。注（33）参照。

(27) 『稿本』巻一「教師用書（一九二八年）」は、生徒は例外なく「多少トモ支那語ヲ聞キカジツテ」いるが発音も語形も「甚シク不正確」だからこれを矯正する必要がある。你・我・他を你的・我的・他的というのがこれは「純正ナモノ」ではない。またよく中国人を指してニ―ヤという者がある

が、これは呼びかけであって中国人の意味ではない、と注意している。この種の注意は最後の「国民科大陸事情及満語」の段階に至るまで教師用書に見られる。

(28) 竹中憲一、前掲解題、同書三三八 三三九頁。

(29) 同書、三三六頁。

(30) 『満洲補充読本』の教材の変化については、前掲『皇国の姿を追って』三六頁以下参照。

(31) 『マンシウ』教師用、在滿教務部、一九四二年、二〇頁。

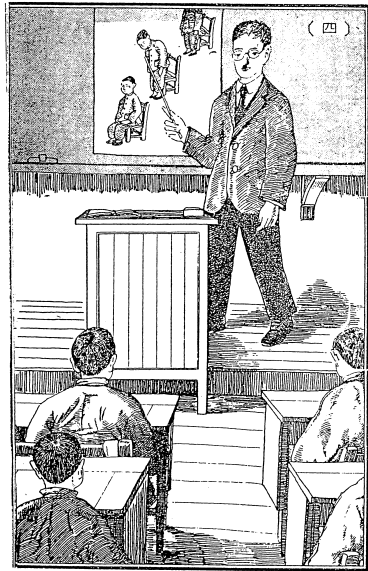
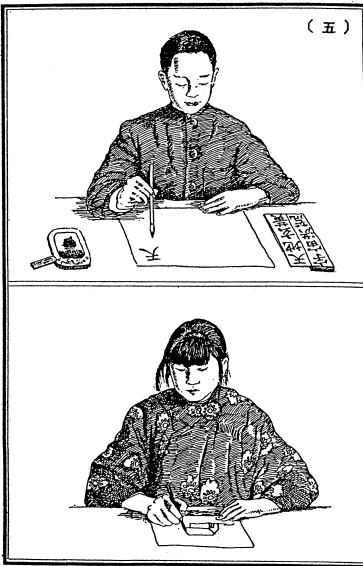
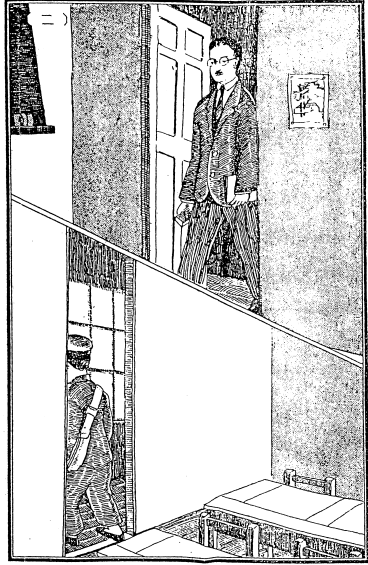
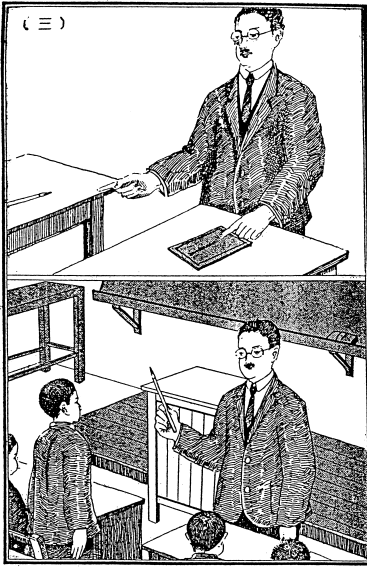
(32) 野村章、前掲書、五六頁。

(33) 『マンシウ』教師用、三五 三六頁及び三九頁。

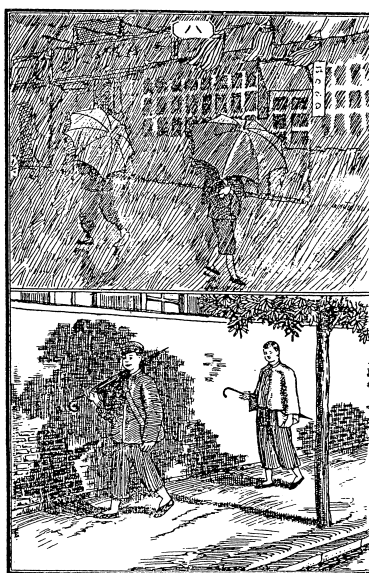
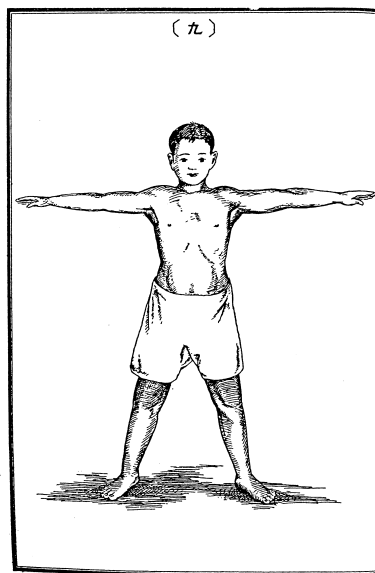
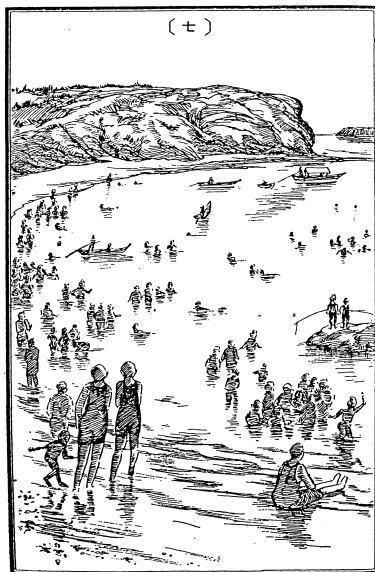
(34) 『マンシウ』教師用、一一頁。

(35) 関東局在滿教務部教科書編輯部『昭和十九年度 編輯部要覧』。

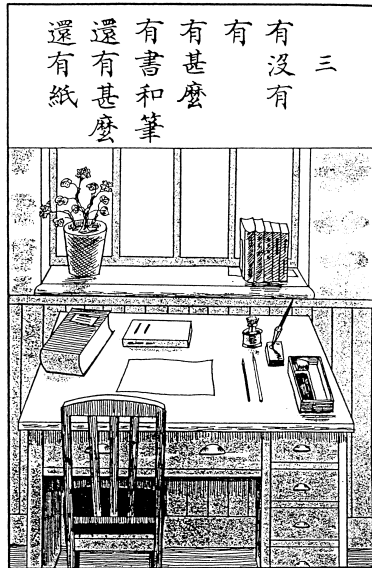
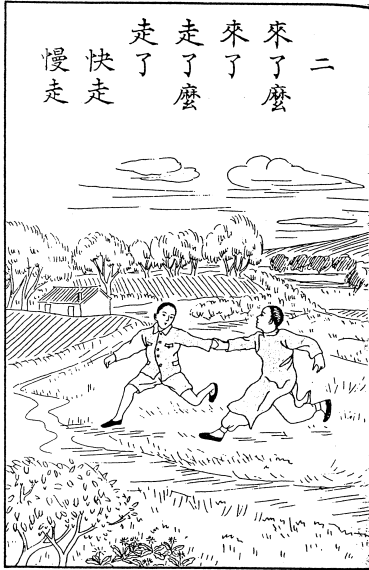
(36) 野村章、前掲書、五七頁。



図版A 1 初等支那語教科書（稿本）卷一（1928年初版）二～五



圖版A 2 初等支那語教科書(稿本)卷二(1928年初版)六~九

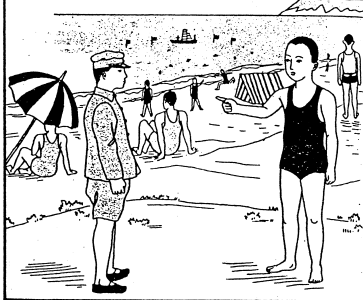


圖版 B 1 初等支那語教科書（改訂版）卷一（1937年初版）一～四

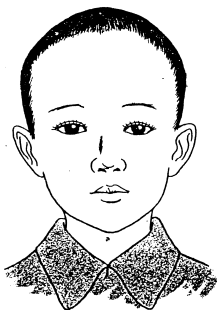
第七 下雨
雨住了麼
還沒住哪
道兒怎麼樣
不好走
街上人不多
街上人少



第六 夏天
夏天
天氣熱
海邊兒
人很多
你會浮水麼
我會一點兒
俗們浮水去罷
我現在有事 不能去



第九 身體
有眼睛
所以能看
有耳朵
所以能聽
有嘴
所以能吃東西
鼻子 腦袋
手和腿



第八 晚上
太陽落了
天黑了
把電燈開開
屋子裏亮
外頭黑
洋火 洋燈
點燈 滅燈

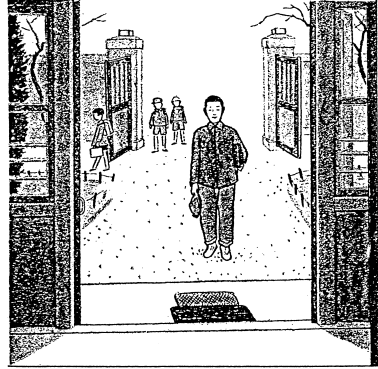


圖版 B 2 初等支那語教科書 (改訂版) 卷二 (1936年初版) 第六~第九

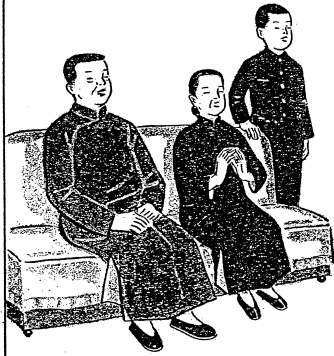
他是先生
先生 來了
「是、來了麼」
「學生 走了麼」
學生 走了
「是、走了」



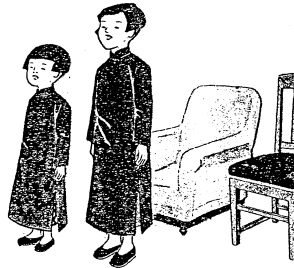
他是先生
先生 來了
「是、來了麼」
「先生 來了麼」
「是、來了」



爸爸 聽
媽媽也 聽
爸爸說
「好」
媽媽也說
「很好」



姐姐 站起來了
妹妹也 站起來了
姐姐 唱
妹妹也 唱
他們 一塊兒唱



圖版 C 初等科滿語 第四學年 (1944 年)